

— NO214 11月号

FOREST NEWS

未来を育てる木を植える
未来を守る木を植える



2025年度 指標

- ①パンタナール地域における潜在自然植生の混植密植形式の植樹の実施
- ②国内において累計 500 本の植樹活動
- ③植樹を通じた環境問題解決のロールモデルをつくる
- ④セミナー や植樹祭を通じて「家族で木を植える」文化の啓蒙
- ⑤混植密植の植樹を推進する他団体との連携



理事長メッセージ

人が自然を壊した分、人が自然をとりもどす

晩秋のこの時期、クマによる被害が連日のように報道されています。理由として考えられるのが次の三つです。①食料不足。冬眠するために体力をつけようとしても山地に餌がない。②個体数の増加。クマの頭数が増えすぎた。③高齢化による山林管理者の人手不足で、結果的にクマの生息域が広がった。この三つが複合的に絡み合い、人とクマが遭遇する機会が増えたということです。

①に対して一番よい方法は、人がクマに餌を提供することです。クマは野草、木の芽、果実、木の実、昆虫（アリ、ハチなど）の雑食性ですが、主食であるドングリをつける木、つまりクヌギ、コナラ、カシワ、ブナ、ミズナラなどを植樹し、人間が伐採する前の林を再生することです。そうすればそれを食し、人とぶつかることなく安心して冬眠します。市町村が一丸となって苗を植えつけば、15～20年で豊かな林が育ちます。

②は食物連鎖、すなわち生態系のバランスの問題です。約120年前までは陸の生態系の頂点にオオカミがいました。しかし人間が害獣として駆除したため絶滅しました（1905年に本州からニホンオオカミが絶滅、1900年頃に北海道からエゾオオカミが絶滅）。天敵がいなくなつたことでクマが増えすぎたのです。もし同じようにクマを害獣と決めつけて駆除すれば、今度はシカやイノシシが増えすぎて人と衝突します。結局、クマによる被害の問題は、100年来の工業化によって人間が生態系のバランスを壊し、野生動物の住処を奪ってしまったツケがまわってきたということです。

したがって、この問題の本質的解決は「人が自然を壊した分、人が自然をとりもどす！」ことになります。何万年も前から日本列島の元々の生態系は、田んぼでも畠でも草原でも砂漠でもなく、森林生態系だったのですから、可能な限り元の姿に近づけることが大切です。

船橋支部主催：どんぐり拾い研修 in 大國魂神社

11月3日船橋支部が確立した【どんぐり拾い→どんぐりを育てる→ポット苗づくり「イベント化」→苗木を植樹祭に貢献する】の流れを体験、相続する第一弾として「どんぐり拾い」研修を開催しました。

場所は大國魂神社、参加者は船橋支部スタッフ+3名。当日、境内は七五三で大にぎわいでしたが、私たちは本殿の裏手へと回り、どんぐり拾いをしていきました。



船橋支部スタッフから説明を受けたあとどんぐりを拾いが始まりました。樹種の違いは、なんとなくわかつても中々名前が出てこない…同じ樹種と言われても違って見える..違う樹種なのに同じに見える..どんぐりの種類も意外と豊富で、見分けるのに一苦労です。どんぐり拾いは奥が深いです。

見かねた？社務所の人が「木の種類くらいはいつでもお答えできますよ」とのこと。もっと勉強して、来年は調布支部で、船橋スタイルのどんぐり拾いを企画していくように準備をしていきます。



どんぐり拾い研修参加者の感想

アマゾン熱帯雨林の伐採など、日々ニュースで目にする世界を取り巻く自然環境の状況は危機的なものが多く、他人事ではありません。未来に不安を抱える中、何か行動を起こしたいと思い、今回の「どんぐり拾いから苗木作り」研修に参加しました。

研修は、どんぐりの見分け方を学び、実際にどんぐりを拾い、特徴を確認しながら樹木を見分けていきましたが、意外と見分け方が難しく戸惑うことが多かったです。

大國魂神社には樹齢500年を超える樹木も多くあります。そんな樹木も初めはこのどんぐり始まり、こんな大きな樹木が育つこと改めて驚きを感じました。自分が育てたどんぐりがこんな木に育つかと思うとワクワクする思いです。



どんぐりの解説をする船橋スタッフ

また、神社でのどんぐり拾いの活動は、日本人が古来から森を大切にしてきた「鎮守の森」の精神に触れるができました。

どんぐりを育てて苗木を育てる方法は、ベランダなどの身近な環境での育成方法で、これなら誰でも取組めそうです。近所の方々や家族と一緒に育ててみたいと思いました。（60代 勤労女性）



自然と共生しながら持続可能な経済圏を生み出す 村作りを目指すアグロフォレストリー戦略

生態系再生から経済圏を生み出す

当法人は、皆様の協力のもと、短期間で生態系を再生する宮脇式植樹に取り組み、その土地本来の豊かな森を再生させる生態系再生の基盤作りを出発しました。

しかし真に持続可能な未来を実現するためには、植樹活動で終わるのではなく、地域経済の課題を同時に解決するかたちに植樹活動を発展させる必要があります。

植樹活動を通じて、現地の貧しい人々の生活が改善されなければ、現地人が森を守るモチベーションが低く、再生した森は守られません。2026年以降は「植樹」「林業」「農業」更には「漁業」を融合させていきながら、生態系と人間が共生していきながら経済活動につなげていくかたちを開拓していくことを目指していきます。

一般的には「アグロフォレストリー」という戦略で知られています。この戦略が持続可能な未来への道筋をつけるための完成形のフェーズになります。

現状の問題解決+未来の幸せを創る

2026年の方向性をまとめると、①宮脇方式による生態系再生の成功の上に、植樹方法と育樹の技法を確立していきます。並行して②アグロフォレストリーによる経済圏創出を融合させていく計画です。これは、環境問題と食糧、貧困問題という難題を同時に解決する持続可能なコミュニティのモデルです。

この成功モデルは、パラグアイ政府に対し不毛の地とされてきたチャコ地方を再生できる具体的な方法を示すことになり、国レベルでの関心を引き出すことが期待されます。

更には、パラグアイ川、アマゾン川地域など、南米各地の環境破壊が進む地域の、再生モデルとして連結できる、人類共通の財産となるとを目指していきます。

地球の「肺」を再生し、世界へ空気と血液を送る。未来の子供たちに豊かな森と生活を保証する。このことが、現状の問題解決+未来の幸せを創る=真の平和につながっていくことを確信します。

2026年ビジョンの動画は[こちら](#)

アグロフォレストリーのイメージ

